

「イエシュアの死と葬り」

ヨハネの福音書 19:35~42

はじめに

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

19:30 イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した」と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。

19:31 その日は備え日であったため、ユダヤ人たちは安息日に(その安息日は大いなる日であったので)、死体を十字架の上に残しておかないように、すねを折ってそれを取りのける処置をピラトに願った。

19:32 それで、兵士たちが来て、イエスといっしょに十字架につけられた第一の者と、もうひとりの者とのすねを折った。

19:33 しかし、イエスのところに来ると、イエスがすでに死んでおられるのを認めたので、そのすねを折らなかった。

19:34 しかし、兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出て来た。

前回のメッセージで、イエシュアは十字架にかかれ、そして激しい苦しみのもと、ついに息を引き取られました。その際の筆者であるヨハネの描写は、非常に詳細なものであると言えます。その理由は、旧約聖書との関連性を強調し、イエシュアが神様の御言葉である聖書の体現者であり、まさに

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

すなわちイエシュアは神様の御言葉そのものであり、神様ご自身であることを指し示すためのものであったと考えられます。ではイエシュアの十字架の、その死を通して示された神様の御言葉とは、一体どのような内容を指し示しているのかをこれらの箇所から考えてみたいと思います。

1. 真実である

19:35 それを目撃した者があかしをしているのである。そのあかしは真実である。その人が、あなたがたにも信じさせるために、真実を話すということをよく知っているのである。

イエシュアは決して死んだように見ただけではなく、たしかにイエシュアは死なれたということが、真実を伝える者の目撃証言、嘘偽りのない事実であることが強調されています。「そのあかし」すなわちイエシュアの十字架の死は「真実である」ことが強調されています。私たちが祈りの時などに必ず告白するアーメン(אמן)「まことに、確かに」という意味のヘブル語がここに使われています。その語源であるアーマン(אמן)

「信じる、信用する」という、この言葉の最初の言及を見てみたいと思います。創世記 15:6 です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

15:5 そして、彼(アブラム)を外に連れ出して仰せられた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」

15:6 彼は【主】を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

これは神様がアブラム、後のアブラハムと交わされた約束の一部分です。アブラハムはその約束、すなわち「あなたの子孫はこのようになる。」天の星のようにおびただしく増える、大いに繁栄することをアーマン、信じました。このように本来の「真実である」アーマンとは、神様とアブラハムとの間に交わされた約束、契約を指し示すものであると考えられます。つまりイエシュアの十字架の死とは、その神様のアブラハムに対する約束を果たす、成就するためのものであるということが示されていると考えられます。「あなたの子孫」すなわちアブラハムの子孫であるイスラエルの民、ユダヤ人たちの、その罪の贖いとしてイエシュアは十字架にかかれ、そして死なれることで、イスラエルの民のすべての罪は赦され、神様の選びの民としてアブラハムに約束された祝福を受け取るようになること、それがイエシュアの十字架の死の本来の目的であると考えられます。そしてこれを「真実である」、アーマンと信じ受け入れる者はすべてイスラエルの民と同様に罪にさだめられないことが次に示されています。

2. 成就

19:36 この事が起こったのは、「彼の骨は一つも砕かれない」という聖書のことばが成就するためであった。

最も残酷な死刑と呼ばれた十字架刑でしたが、イエシュアの骨は一つも砕かれることはありませんでした。それは以下の預言が成就するためであったと考えられます。

【新改訳改訂第3版】

詩篇

34:19 正しい者の悩みは多い。しかし、【主】はそのすべてから彼を救い出される。

34:20 主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、砕かれることはない。

34:21 悪は悪者を殺し、正しい者を憎む者は罪に定められる。

34:22 【主】はそのしもべのたましいを贖い出される。主に身を避ける者は、だれも罪に定められない。

この御言葉のように、イエシュアの骨は一つとして砕かれることはありませんでした。それは主のしもべたち、主に身を避ける者、すなわち神様を信じるすべての者が「だれも罪に定められない」ことを示すためであったと考えられます。またイエシュアの骨が折られることがなかった理由について、以下のような記述との関連性も考えられます。

【新改訳改訂第3版】

民数記

9:12 そのうちの少しでも朝まで残してはならない。またその骨を一本でも折ってはならない。すべて過越のいけにえのおきてに従ってそれをささげなければならない。

イエシュアのご遺体は、その日の夕暮れ前には十字架から取り下ろされました。つまり次の日の「朝まで」そこに残されることはありませんでした。そして「その骨を一本でも折られる」ことはありませんでした。このように、イエシュアの十字架の死がイスラエルの「過ぎ越しのいけにえ」としてのものであったことが示されているとも考えられます。しかしイエシュアのこの「過ぎ越しのいけにえ」は永遠の滅びが過ぎ越される、「永遠の贖い」であったことが示されています。

【新改訳改訂第3版】

ヘブル

9:11 しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事からの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、

9:12 また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。

神様を信じるすべての者のすべての罪を、永遠に贖う「過ぎ越しのいけにえ」、それがイエシュアの十字架の死の持つ意味であったと考えられます。

19:37 また聖書の別のところには、「彼らは自分たちが突き刺した方を見る」と言われているからである。またイエシュアはその死の際、わき腹に槍を刺し通されました。それは以下の預言を指し示すものであったと考えられます。

【新改訳改訂第3版】

ゼカリヤ

12:9 その日、わたしは、エルサレムに攻めて来るすべての国々を捜して滅ぼそう。

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。

これはエルサレム、すなわちイスラエルの民、ユダヤ人たちに対して語られた預言です。彼らが自分たち(の先祖)が神様の御子を、メシアであるイエシュアを「突き刺した」ことすなわち十字架にかけて殺したことを、心から悔やんで激しく涙する日が来るという預言です。その時彼らはイエシュアを仰ぎ見る、つまりイエシュアが再びこの地上に戻ってこられる「地上再臨」が成就することが指し示されていると考えられます。またヨハネの黙示録にも「突き刺した者」について同じような記述があります。

【新改訳改訂第3版】

黙示録

1:7 **見よ、彼が、雲に乗って来られる。**すべての目、ことに彼を**突き刺した者たちが**、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。

このように、イエシュアが十字架において槍でそのわき腹を「突き刺された」という出来事には、イエシュアが再びこの地上に戻ってこられること、「地上再臨」されることが示されていると考えられます。つまり、イエシュアの十字架のその死の真実に示された神様がアブラハムとその子孫に約束されたことの成就是、イエシュアが「地上再臨」される時に果たされる、完了するということが指し示されていると考えられます。

3. アリマタヤのヨセフ

19:38 そのあとで、イエスの弟子ではあったがユダヤ人を恐れてそのことを隠していたアリマタヤのヨセフが、イエスのからだを取りかたづけたいとピラトに願った。それで、ピラトは許可を与えた。そこで彼は来て、イエスのからだを取り降ろした。

こうしてイエシュアの御身体は十字架から取り下ろされました。「アリマタヤのヨセフ」という人がその役目を自ら引き受けたことが記されています。しかし彼はイエシュアの「弟子ではあったがユダヤ人たちを恐れてそのことを隠して」いました。このような人物について、ヨハネの福音書はこのように述べています。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

12:42 …指導者たちの中にもイエスを信じる者がたくさんいた。ただ、パリサイ人たちをはばかり、告白はしなかった。会堂から追放されないためであった。

12:43 **彼らは、神からの栄誉よりも、人の栄誉を愛した**からである。

アリマタヤのヨセフ、彼は「神からの栄誉よりも、人の栄誉を愛した」ために、イエシュアの弟子であることを隠していました。しかし彼はイエシュアの十字架の死を見て悔い改めたのだと考えられます。アリマタヤ(אִרְמָתַיָּא)とは「山地、高地」を意味します。マタイの福音書でイエシュアはこのように述べておられます。

【新改訳改訂第3版】

マタイ

5:14 **あなたがたは、世界の光です。山の上**にある町は隠れる事ができません。

アリマタヤのヨセフはユダヤ人たちを恐れて隠れていましたが、イエシュアの十字架を目の当たりにし、その死を見た時、彼は奮い立ってアリマタヤ、まさに山の上に出て、隠れる事をやめたことが表されていると考えられます。その事によって、彼は真のイエシュアの弟子として加えられたと考えられます。なぜなら彼の名ヨセフ(יְהוֹשֻׁעַ)という名は、ヤーサフ(יָסַף)「加える、もう一度(再び)~する、」という意味の動詞が語源となっているからです。アリマタヤのヨセフ、彼の姿は、神様の民として選ばれながら、「神からの栄誉よりも人の栄

譽を愛する」という名の偶像礼拝によって神様から離れ、しかし十字架で死なれたイエシュアによって神様に立ち返り、ヤーサフすなわち「再び神様の民として加えられる」イスラエルの民、ユダヤ人たちを指し示す型であり、先ほどのゼカリヤ 12:10 に示された「恵みと哀願の霊」に満たされ「自分たちが突き刺した者」イエシュアを仰ぎ見る者たちの型であると考えられます。

4. ニコデモ

19:39 前に、夜イエスのところに来たニコデモも、没薬とアロエを混ぜ合わせたものをおよそ三十キログラムばかり持って、やって来た。

このニコデモという人物もまた「夜イエスのところに来た」とあるように、アリマタヤのヨセフと同様、ユダヤ人たちを恐れ、イエシュアの弟子であることを隠していた者でした。そんな彼もこのヨセフとともに立ち上がりました。ニコデモ(נִיכֹמֶדֶם)にはケデム(קֶדֶם)「東」という意味の言葉を見つけることができます。このケデムの最初の言及を見てみますと、創世記 2:8 になります。

【新改訳改訂第3版】

創世記

2:8 神である【主】は東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。

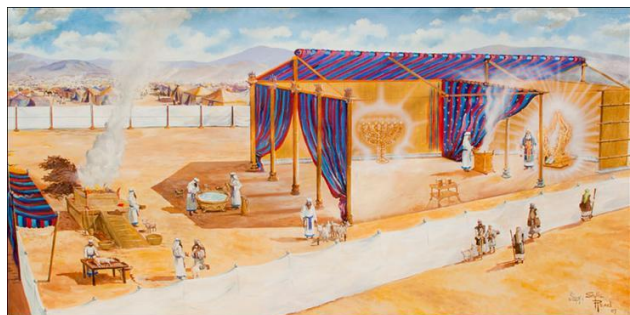
このように、「東」ケデムとは、「エデンの園」を指し示す言葉であると考えられ、またそこは「主の形造った人」が「置かれる」場所であることが解ります。さらにこのニコデモは「没薬とアロエ」を持ってきたとありますが、没薬はヘブル語でモール(מוֹל)と言い、モーセの幕屋で主の前にささげられた「最上の香料」の筆頭に挙げられる品物でした。

【新改訳改訂第3版】

出エジプト記

30:23 「あなたは、最上の香料を取れ。液体の没薬五百シエケル、かおりの強い肉桂をその半分——二百五十シエケル——

モーセの幕屋の礼拝において、動物や穀物のいけにえは、大庭すなわち聖所の外でささげられました。しかし香料は聖所の中で、至聖所に最も近い香壇でささげられました。つまりこの「最上の香料」であるモールは、神様との近しい、親密な交わりを指し示していると考えられます。そしてこの没薬と混ぜ合わされた「アロエ」についてです



が、これをヘブル語でアハール(אָהַר)と言いますが、これと同じ綴りでアーハル(אָהַר)という動詞があり、その意味はなんと「天幕、幕屋を張る」という意味なのです。ちなみ「幕屋」を意味する名詞オーヘル(אָהֶל)も同様です。このように、アロエは神様を礼拝する、神様と交わる場所である「幕屋」を指し示していると考え

えられます。これらの言葉の意味を統合すると「最上の礼拝をささげる幕屋、それはエデンの園が建て直されること」である、というメッセージがこのニコデモが没薬とアロエを持ってイエシュアのもとに帰って来たことの中に表されていると考えられます。アリマタヤのヨセフとは違い、ニコデモはかつてイエシュアと直接的に交わりを持っていました。ですから彼はイエシュアのもとに戻って来た、帰って来た、再び関係が回復したのです。すなわちこれは神様の国、御国の完成である、エデンの回復を指し示す型であり、つまりイエシュアの十字架の死とは、まさにその回復のためのものであったということが示されていると考えられます。

5. マント

19:40 そこで、彼らはイエスのからだを取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従って、それを香料といっしょに亜麻布で巻いた。

「彼ら」すなわちアリマタヤのヨセフとニコデモは、イエシュアの御身体を受け取りました。それは彼らの名前が示す神様の国、御国の王として、イエシュアが迎え入れられることを指し示していると考えられます。ローマの刑罰である十字架刑に処せられたイエシュアでしたが、その埋葬はユダヤ人の習慣に従って執り行われました。イエシュアの御身体を「亜麻布で巻いた」とありますが、ここで「亜麻布」と訳されているヘブル語タフリーク(תפריק)は、旧約聖書では「マント」と訳され、エステル記 8:15 の一箇所にのみ使われている言葉です。

【新改訳改訂第3版】

エステル記

8:15 モルデカイは、青色と白色の王服を着、大きな金の冠をかぶり、白亜麻布と紫色のマントをまとい、王の前から出て来た。するとシュシャンの町は喜びの声にあふれた。

8:16 ユダヤ人にとって、それは光と、喜びと、楽しみと、栄誉であった。

この出来事は、エステルとモルデカイの働きによって、ユダヤ人の敵であるハマンによって企てられたユダヤ人絶滅計画が阻止され、ハマンとその一族は死刑に処され、ユダヤ人モルデカイが王服をまとい、王の馬にまたがり、ユダヤ人の救いと勝利を示した場面です。ここで「マント」と訳されているのが、イエシュアの御身体を包んだタフリークです。それはイエシュアがモルデカイに型として表されたユダヤ人の王、栄光の王であり、そしてイエシュアの十字架の死は、ユダヤ人の罪を永遠に贖う、まさに彼らにとって「光と、喜びと、楽しみと、栄誉で」あることが指し示されていると考えられます。

6. 園の墓

19:41 イエスが十字架につけられた場所に園があって、そこには、まだだれも葬られたことのない新しい墓があった。

イエシュアが十字架にかかられた場所には「園」がありました。ヘブル語でこれをガン(גן)と言います。その最初の言及はやはり創世記 2:8 です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

2:8 神である【主】は東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。

やはりこの「園」ガンは「エデンの園」を指し示していると考えられます。そしてその「エデンの園」とは何であるかが、「新しい『墓』」という言葉に示されていると考えられます。「墓」はヘブル語でケヴェル(קבר)と言い、その最初の言及は創世記 23:4 に記されています。

【新改訳改訂第3版】

創世記

23:4 「私はあなたがたの中に居留している異国人ですが、あなたがたのところで私有の墓地を私に譲っていただきたい。そうすれば私のところから移して、死んだ者を葬ることができるのです。」

23:5 ヘテ人たちはアブラハムに答えて言った。

23:6 「ご主人。私たちの言うことを聞き入れてください。あなたは私たちの間にあって、**神のつかさ**です。私たちの**最上の墓地**に、なくなられた方を葬ってください。私たちの中で、だれひとり、なくなられた方を葬る墓地を拒む者はありません。」

この出来事は、アブラハムの妻サラが死に、彼女を葬るための「墓地」ケヴェルを買い求めるアブラハムの様子が記されています。このケヴェルが示すものは「神のつかさであるアブラハムの、その最上の所有地」です。つまりやがてイエシュアの再臨によって回復される「エデンの園」とは、アブラハムとその子孫であるイスラエルの民、ユダヤ人たちが「神のつかさ」となり、彼らを中心とした「最上の」場所であるということが示されていると考えられます。そしてそれを拒む者、阻む者はもはや誰一人いない、先ほどのエステル記のハマンのようなイスラエルの敵がもはや存在しない世界、それがこのケヴェルの指し示す回復されたエデンの園である神様の国、御国であると考えられます。

7. 近づく

19:42 その日がユダヤ人の備え日であったため、墓が近かったので、彼らはイエスをそこに納めた。

「備えの日」とは、安息日の前日を意味します。安息日とは、神様の天地創造の御業の完成を指し示す日であり、神様のご計画である神様の国、御国の完成を指し示す日です。そのためまさに「備え」としてイエシュアは十字架にかかれ、そして死なれたということが示されていると考えられます。そしてまた墓ケヴェルが「近かった」とあるように、イエシュアが十字架にかかれ、そして死なれたからには、神様のご計画の完成である神様の国、御国の到来がもはや「近い」ことが示されていると考えられます。ちなみに「近づく」ことをヘブル語でカーラヴ(קרוב)と言い、墓ケヴェル(קבר)と非常によく似た綴りであることは興味深い、ヘブル語でしか解らない事実です。つまり「墓が近かった」そして「イエスをそこに納めた」とは以下の御言葉につながると考えられます。

【新改訳改訂第3版】

マタイ

3:2 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

「悔い改める」ことを意味するヘブル語シューヴ(שוב)は「戻る、立ち返る」すなわち本来あるべき場所へ移動し、そこに「納まる」ことを意味します。このように「墓が近かったので～納めた」という日本語の表現は一見何の変哲もない、あまり意味のないことのように捉えられてしまいがちですが、ヘブル語の視点すなわち神様のご計画の視点で見ると、大きな意味を持っていることが解ります。

また「天の御国が近づく」とは、ただ御国が成就するその日という時期的な事柄だけを指すのではなく、イエシュアの十字架の死によって、イスラエルの民のすべての罪が贖われ、神様とイスラエルの民との関係が回復され、イスラエルはまさに「神のつかさ」の民となり、神様に「近づく」ことができる存在となる状態、つまり神様との親しい交わり関係をも指し示していると考えられます。今日の私たちの祈りが、イエシュアの御名によって、イエシュアを通して祈るなら、その祈りは天におられる父なる神様に聞いていただけるようになっていることがまさにその型と言えます。しかしそればかりでなく、神様の思い、願いを受け取ることができるようになっていることを覚えましょう。イエシュアによって、イエシュアを通して天におられる父なる神様の思い、願い、つまりそのご計画を知ることができるのです。ですから私たちはイエシュアの御名によって祈るだけでなく、イエシュアを通して、イエシュアが語られた、またなされた一つひとつのことに目を留め、そこから神様のやりたいこと、その思いと願い、ご計画を受け取る者となれるよう、祈り求めてまいりましょう。